インタビューコーナー

地域医療再生のため、医療従事者の適正配置にも気を配り、二次・三次医療圏を見据えた、予防医療・急性期医療・慢性期医療・在宅医療・リハビリ・介護などを統合した、未来に向けた地域医療のシステム作りが急務となっています。

琉球大学医学部附属病院地域医療システム学講座 教授
小宮　一郎　先生

Q1. 当講座についてご紹介いただくと共に、教授に就任されてのご感想と今後の抱負をお聞かせください。

琉球大学医学部附属病院の地域医療システム学講座は沖縄県の寄附講座として平成22年12月に新設されました。全国的な地域医療再生への取り組みの中で、国が主導して各都道府県が開設する形をとっています。既存組織である琉球大学医学部附属病院の地域医療部との連携のもとに事業を展開していきます。

当講座の事業の柱は3つあると考えています。第一は地域枠学生の教育を中心に、医学部全体での地域医療教育を充実させ、将来の県内の地域医療を担う人材を育てる事業を行うことです。当講座は医学部教育カリキュラムの改訂や新たな教育法の導入、さらに臨床実習の充実（クリニカルクラークシップの充実）に関わっています。

第二は初期臨床研修医や離島研修中の若手医師に対して臨床研修の補助を行うことであります。大学病院の臨床各科、シミュレーションセンターや専門研修センターとの連携事業として、総合医的能力を併せ持った専門医育成の手助けを行い、離島や県北部地域の医療に貢献できるような態勢を整えたいと思っています。専門性を持った大学病院の医師がいかに地域医療に関わっていくか、新たな方向性を模索しています。

第三に沖縄県や県立病院、医師会などと連携の上で、琉球大学医学部が県内の離島や北部地域での地域医療再生に関与したいと考えています。

今まで私は大学教員あるいは内科医として大学病院と地域の医療機関等で活動して来ましたが、今後は地域医療教育を中心とした医学教育と、沖縄県での地域医療の再生や再構築へ関与することで県民に貢献したいと思っています。

Q2. 平成24年春に完成するおきなわクリニカルシミュレーションセンターは、質の高い医師や医療従事者の養成が期待されるところですが、当講座は、どのような連携をとっていかれるのでしょうか。お聞かせください。

当講座と同様に地域医療教育開発講座がシミュレーション事業を県内に普及させる目的で平成22年9月に開設されました。両講座が協力し合って沖縄県の地域医療に関わっていく訳ですが、シミュレーション事業は医師・看護師・薬剤師など多職種に渡って利用可能なものであります。琉球大学医学部の敷地内に完成予定の「おきなわクリニカルシミュレーションセンター」は、質量ともに日本で最高のものとなりま

す。シミュレーション事業は24時間の事業展開を目指して、県内の医療従事者がいつでも学べる体制を整える予定です。琉球大学の医学部学生が卒前の学習として日本で最も進んだシミュレーション教育を受けることができます。さらにセンターを利用して学生のチュートリアル学習（問題解決型の学習、学生による能動的な学習形態）も可能となり、他大学より遅れていた教育方法の改革を実現できるようになります。

さらに初期臨床研修医や離島研修中の若手医師が定期的にクリニカルシミュレーションセンターで学ぶことにより、より充実した研修が可能となり、結果として沖縄の地域医療に貢献できるものと考えています。このような事業に地域医療教育開発講座と協力しながら主体的に関わりたいと考えています。

Q3. 地域医療の確保について、県行政、大学病院、県立病院、民間の病院、医師会の役割などをどのようにお考えでしょうか。また沖縄県の各々の連携について今後の課題はどこにあるとお考えでしょうか。お聞かせください。

新たな臨床研修制度の導入があり、その結果として我が国の多くの地域で医師の偏在化や地域医療の崩壊が加速されてきました。このような状況を打破すべく、県行政・大学病院さらには中部病院をはじめとした県立病院が一体となって、本県における地域医療再生のための事業を展開すべきと考えます。これの実現のためには医師会や県内の民間病院との連携も必要になってきます。この事業推進のためには、県や行政が主体となり実行力を伴う協議機関を設立する必要があると考えます。県内の諸機関との連携の中で、実効的な地域医療再生のための組織やシステム作りが必要であります。

医師のみならず、県内の医療従事者全体の適正なる配置にも気を配り、二次・三次医療圏を見据え、予防医療・急性期医療・慢性期医療・在宅医療・リハビリ・介護などを統合的にできる枠組みを構築していくことが急務であります。既に他県では行政や保健所などが関与して組織作りが行われていると聞いています。予算を使った建物建設や機材の購入ではなく、未来に向けたシステム作りが必要となっています。残念ながら、本県においては、この主導する組織自体はあるようですが、現実の事業が進捗していないと思います。私が関与していないだけかもしれませんが、少なくとも多くの医療関係者の目に見えてきていません。本講座の設立にも関係する事業でもあります。早急な組織的な取り組みを県や医師会にお願いしたいと思います。

Q4. 琉球大学医学部は沖縄県において新しい医療人材を育成する機関として重要な役割を果たしていると思いますが、若い世代に対しての期待、または要望などありましたらお聞かせ下さい。

繰り返しになりますが、琉球大学医学部は総合医的能力を併せ持った専門医育成を目指し、離島や北部地域の医療に貢献したいと考えています。現在琉球大学医学部では地域枠学生の教育を通じて、医学部での地域医療教育を充実させています、地域枠学生を種々のイベントに参加させており、彼らの医療や医学そのものに対する意識は格段に向上しています。本年2月には地域枠学生が旭川医科大学と周辺地域の研修に、さらには本年9月には秋田の地域医療と東日本大震災の被災地の研修に参加しました。素晴らしい研修ができ、学生の地域医療に対する意識も格段に深くなりました。彼らが卒業すれば沖縄の地域医療は変わるものと確信しています。しかし、このような活動に対して少し冷めた見方をする学生たちも存在します。このような学生には、医師になろうとして医学部を目指した頃の気持ちに帰って、地域医療や将来の日本の医療さらには社会全体について常に関心を持っていただきたいと思います。

Q5. 県医師会に対するご要望がございましたらお聞かせください。

当講座は県内の多くの組織との関わり合い中で、地域医療の再生や充実に貢献したいと思っています。この事業の推進のためには、県や各自治体のみならず、県医師会のバックアップが不可欠なものとなります。医師会には、地域医療再生のためのシステム作りに是非主導力を発揮していただきたいと願っています。

Q6. 最後に日頃の健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせ下さい。

健康法としては、水泳を週に1回、テニスを月に1～2回、ウォーキングをごく稀に行っています。趣味は自宅ベランダの鉢植えの世話と時代小説を読むことです。座右の銘は余りないのですが、しいて言えば、いわゆる四知で、「天知る地知る我知る人知る」です。小学生の頃に母によく言われました。

この度は、インタビューへご回答頂き、誠に有難うございました。

インタービューアー：広報委員　玉井 修